

カンタン・メイヤスの思弁的唯物論(Matérialisme Spéculatif)

河野勝彦

1. 新しい実在論の動き

21 世紀に入ってから、ヨーロッパで新しい実在論の動きが起きている。それは、「思弁的実在論(speculative realism)」と言われたり、「新実在論(new realism)」と称されたりするが、そのなかでも、フランスのカンタン・メイヤスの唱える「思弁的唯物論(matérialisme spéculatif)」が注目を浴びている。

唯物論とは、エンゲルスが『フォイエルバッハ論』の中で定式化しているように、思考と存在、精神と自然との関係において、後者を根源的なものと見なし、しかも思考が現実の世界を認識できると主張する立場であるが、メイヤスもまた、この唯物論の立場を継承する。メイヤスはその『有限性の後で』で次のように、彼が言う「思弁的唯物論」を説明している。

「思弁的たらんとする——すなわち思惟のない存在を絶対的な実在とする——全唯物論は、実際に、思惟が必然的ではない（何かは思惟なしに存在可能である）ことと、思惟は思惟が存在しないときに存在するはずのものを思惟することができることを肯定することにあるのでなければならない。唯物論は、もしそれが思弁的な道を採用するならば、我々がそれを考えるという事実を捨象しつつ、所与の実在性を考えることが可能であると信じるように強制される。すべての唯物論のパラダイムであるエピクロス主義については、このようであって、思惟は、空虚やアトム概念を介して、あらゆる事物の絶対的な本性に接近することができることを主張し、この本性が思惟の働きに必ずしも相関的ではないと主張する。というのも思惟はその本性に関して、偶然的な仕方ではしか実在しないからである」⁽¹⁾。

唯物論は、フォイエルバッハやエンゲルス、レーニンを除けば、カント以来、正面切って論じられることは少なく、大陸哲学においては皆無と言ってよい状態であった。それがここに来て、唯物論あるいは実在論を主張する論者が輩出するようになっている。

新しい実在論の動きは、2007 年 4 月 2 日にロンドン大学ゴールドスミス校で持たれた「思弁的実在論」についての画期的なコロキウムに発している。このコロキウムには、グラハム・ハーマン、イアン・ハミルトン・グラント、レイ・ブラッシー、そしてカンタン・メイヤスの四人が参加している。そして、この四人の他にも、マウリツィオ・フェラーリスなど実在論の新しい展開を表明する論者もいるが、「実在論」ではなく「唯物論」でなければならないというのがメイヤスの特徴である。

実在論という場合、それはカントが言った経験的実在論ではなく、あくまで意識から独立の実在を認める実在論でなければならない。ヒラリー・パトナムが一時期採っていた内的実在論(internal realism)は、本来の実在論ではないし、「心は常にすでにそれ自身の外にある対象を志向し、現存在は常にすでに世界に投げ出されている」と言って世界や対象の実在性を認める現象学やハイデガーもまた、意識から独立の実在を認めるものではないので、本来の意味で「実在論」ではない。

しかしメイヤスは、同じ意識から独立の実在を認める立場であっても、「思弁的実在論」ではなく「思弁的唯物論」でなければならないと言う。それは何故であるか。メイヤスに言わせると、パークリは、「唯物論の敵」であるが、「実在論の友」である。というのも、「バ

ークリは、精神の实在論者であり、観念の实在論者であるからである」⁽²⁾。そして、ゴールドスミスの四人の实在論者も二つに割れているのである。

「思弁的实在論」という呼び名は、私が共に加わってきた運動（それ自身重要な）を指すが、私の企てにすべて一致するわけではない。というのも、それはまた主観主義(subjectalism)という私が反対しようとする選択肢を含んでいるからである。……4人の哲学者の内、イアン・ハミルトン・グラントは、(ドゥルーザー) シェリング主義者であり、グラハム・ハーマンは、我々の事物に対する主観的な関係を事物それ自身のなかに投影することによって、それを実体化しているからである」⁽³⁾。メイヤサーの言う主観主義とは、生命主義や汎心論、ヘーゲルのロゴスや精神、ニーチェの力への意志、ベルクソンの持続など、主観の特性を実体化しその絶対的存在を唱える主観主義的形而上学的論者のことである⁽⁴⁾。ゴールドスミスの思弁的实在論者の中にも、唯物論とは異なる主観主義者がいるというのである。

2. 観念論ではなく、近現代哲学に共通する相関主義を批判

メイヤサーが脚光を浴びたのは、彼の相関主義批判にある。

相関主義：観念論よりもより包括的な立場。

(1)相関主義(corrélationisme)とは

「我々は思惟と存在の相関関係にしか接近できず、切り離して捉えられたこれらの項の一つに決して接近することはできない。今後、我々は、そのように理解された相関関係の越えられない性格を主張する思想の流れ全体を相関主義(corrélationisme)と呼ぶことにする。」
(18,一六)

物自体、即自存在の認識不可能性

カント以後：真の実体(イデア、個体、アトム、神)は何か？→真の相関（主観－客観、ノエシス－ノエマ、言語－指示）は何か？

「20世紀の相関の主要な二つの境界(milieux)は、意識と言語であり、それぞれ現象学と分析哲学を支えた」(20,一七)。

「近代人は、批判以前の思想家の大いなる外(le Grand Dehors)、絶対的な外(le Dehors Absolu)を失ってしまった」(22,一九)。

(2)二種類の相関主義：宗教性の回帰

「弱い相関主義」と「強い相関主義」

a) 弱い相関主義——カントの相関主義：「物自体」の存在を認め、物自体は知られない(inconnaisable)が、思考可能(pensable)であるとし、また、理由律(principe de raison)は否定するが、無矛盾律(principe de non-contradiction)は認める立場。

b) 強い相関主義——フッサールの現象学、ハイデガー、ウィトゲンシュタインなどの現代哲学の立場：物自体の存在を認めず、それは認識されないだけでなく、思考不可能(impensable)であるとし、理由律も無矛盾律も認めない。

3. 相関主義の批判——祖先以前の言明の解釈をめぐって

「祖先以前の(ancestral)」な出来事：宇宙の始まり(135億年前)、地球の形成(44億5千万年前)、地球上の生命の始まり(35億年前)、人間の起源(ホモハビリス、200万年前)などが、放射性崩壊の速度が知られた同位元素や熱ルミネセンスの法則などによって測定

相関主義の言う循環を破っており、相関主義が成り立たないことを示している

レーニン『唯物論と経験批判論』第一章第四節「自然は人間以前に存在したか？」において、「自然科学は、人間も、また一般にどんな生物もその上に存在しなかったし、また存在できなかったような状態のもとで、地球が存在していた、ということを肯定的に主張している」⁽⁵⁾

相関主義者の対処：「出来事 x が人間の出現の何年も前に生じた」ことについては、何も異議を唱えず、ただ、「人間にとって（科学者にとって）」(31,二九～三〇)という補足を付け加える。

4. 形而上学的唯物論ではなく思弁的唯物論

デカルト、ロックなどの物質の第一性質の議論を復活させる。

「第一性質、第二性質の理論は、取り返しもつかない有効性の切れた哲学的な過去に属するように見えるが、今やそれを回復させるときである。……そこで問題にされているのは、思考の絶対的なものへの関係そのものである」(13,九)。

「延長の概念を介在させることを避ける。なぜなら、延長の概念は、感覚的な表象から切り離すことができないからである。色の付いていない延長を想像できない。第二性質をとまなわぬ延長を想像できない。今日の言葉でデカルトのテーゼを再活性化するためには、それを擁護することを理解する言葉で言うためには、次のように主張するであろう。対象について数学的な語によって定式され得るすべてのものは、それを対象そのものの特性として考えることに理がある」(16,一二)。

メイヤサーは、相関主義が唱えるこの相関の循環を否定するのではなく、それを認める。それを認めた上で、なお、その相関の循環を突破し、相関の外へ、大いなる外(*le Grand Dehors*)、絶対的な外(*le Dehors Absolu*)へ出ようとする。それを、デカルトのコギトによる形而上学的省察の論証過程に倣って行おうとする。

デカルトの『省察』：コギトの確実性に行き着いた後、意識から独立の絶対者である神と物体の存在証明。

メイヤサーは、「カントの存在論的証明の論駁は、デカルトの議論だけではなく、ある規定された存在者の絶対的な必然性を論証すると称するあらゆる証明を論駁する」(57,六〇)ことになり、これによりドグマティックなすべての形而上学(イデア、純粋な現実態、アトム、不可分な魂、調和のとれた世界、完全な神、無限の実体、世界精神、世界史など)の終焉をもたらすことになったと見る。存在論的証明の棄却とともに、理由律の棄却——世界の絶対的必然性の説明原理の棄却——を招くことになった。

メイヤサーの課題：「アンセストラルな言明に、それだからと言ってドグマティズムに戻ることなしに、意味を保存することを望むなら、我々は絶対的に必然的ないかなる存在者にも導かない絶対的な必然性を見出さねばならない。言い換えれば我々は、絶対的な必然性であるようないかなるものも考えることなしに、絶対的な必然性を考えなければならない」(59,六三)。絶対的な存在者ではなく、絶対的必然性を考えることが課題となる。

この課題は、形而上学的(*métaphysique*)な課題ではなく、思弁的(*spéculative*)な課題である。

メイヤサーは、相関以前に戻ることはしない。むしろ相関主義の形而上学批判を支持し、それを認めたくえで、絶対的な必然性にいたる絶対的な思弁的思惟を展開するのである。

その点で、メイヤサーの相関主義に対する態度は、他の思弁的実在論者とは異なっている。「ゴールドスミス以外の三人の思弁的実在論者は、相関主義を全否定するが、メイヤサーは、そうではない。相関主義は、「大いなる外(le Grand Dehors)」と呼ぶものへと思考を開く」^⑥と考えるのである。メイヤサーの「思弁的唯物論」は、エピクロス唯物論のような形而上学的独断的な唯物論ではなく、最も強力な相関主義と対決し、その対決を通して展開される唯物論である。

5. 強い相関主義との対決を介して

メイヤサーの「思弁的唯物論」展開の歩み：「その原理において非デカルト的であるが、デカルトが第2省察において一度コギトの真理を確立したあと、『省察』で辿る歩みと相同」。

大いなる外の「第一の絶対者」(ハイパーカオス) デカルトにおける延長実体についての誠実な神の役割を果たし、祖先以前の言明の中に含まれている数学的言明の真理(第二の派生的な絶対者)を保証すると見る。

メイヤサーは、強い相関主義の独我論を打ち破ることを目指す。

メイヤサーは、強いモデルの網の目を通過することのできる非一形而上学的な絶対的なものを探究するために、相関の外への道を開こうとする。あくまで、強い相関主義の唱える相関の循環を認めた上で、それを突破する絶対的なものを探求するのである。

メイヤサーによる相関主義の唱える相関の循環を破る道は、二段階になっている。それは、強い相関主義の二つの原則をそのまま認めたいうえで展開される。強い相関主義の第一の原則は、弱い相関主義も含めて相関主義全体に共通のもので、我々は相関関係にしか関わらず、「それ自体」には関われないということであり、第二の原則は、相関の事実性(facticité)、すなわち相関の偶然性、相関の無理由性である。第一の原則によって、独断的な実在論、エピクロスの唯物論は、失効させられる。

相関主義の第二の原則である相関の事実性を絶対化することによって、主観主義的形而上学を論駁するとともに相関の循環の輪から脱出することができると次のように言う。

「もし相関の循環の猛威を免れるであろう絶対的なものがなお考えられるのであれば、それは、強いモデルの第二の決定の絶対化——すなわち事実性——から出てくるものでしかあり得ないであろう。言い換えれば、もし我々が事実性のもとに存在論的な真理を発見するならば——もし我々が事実によって脱絶対化へとその力を与える源泉そのものがまったく反対に絶対的な存在への接近であるならば——、そのときには我々はいかなる相関的な懐疑論ももはや到達できない真理へと近づくことになるであろう。なぜなら今回は、そのような絶対化に反対することのできる第三の原理は存在しないからである。したがって、我々は、いかなる点において絶対的なものが、相関的なものではなく相関の事実性であるかを理解しなければならぬのである。我々は、いかなる点において事実性が、思惟がその本質的な限界から行う経験であるのではなく、反対に、思惟が絶対的なものについてのその知について行う経験であるかを示さなければならない。我々は、事実性において絶対的なものの非接近可能性ではなく、即自的なものの顕れを捉えなければならない。存在するものの思惟の永続的な欠陥の徴ではなく、存在するものの永遠の特性を」(83-84,九二～九三)。

メイヤサーは、彼の思弁的唯物論を展開するために、相関主義の中でも最強のそれを認めたいうえで、その二つの原則を絶対化することによって、相関主義のバリアーを通過していく。相関によって得られる所与をそれ自身、絶対的なものと認めて、しかもその相関の事実性を絶対的なものとして、すなわち相関の偶然性を必然的なもの、絶対的なものと見なすことに

よって、絶対的なものに到達することができたと言う。

6. 無理由の原理(le principe d'irraison)＝事実論性の原理(le principe de factualité)

事実性とは、事物の存在の特性、絶対的な特性である。我々が考えようと考えまいとそうであり続ける特性である。世界の諸事物は、それが従う法則とともに、そのすべてが、理由無しに存在しているということ、これをメイヤサーは、「無理由の原理(le principe d'irraison)」と言う。

「事実性を、理由なしに存在する世界全体と同様に事物全体の実在的な特性とする必要がある。しかも理由なしに実際に他になり得るという資格で。我々は、理由の究極的な不在——我々が無理由(irraison)と呼ぶもの——が、絶対的な存在論的な特性であり、我々の知の有限性の^{しるし}徴ではないということ捉える必要がある」(85,九四)。

「今や我々は、関連の循環を通り抜けたと見なすことが出来る。少なくとも我々が思惟を大いなる外——思惟されようとされまいと存在にとって無関心である永遠のそれ自体——から切り離す関連の循環によって建てられた壁のなかに一つの出口を穿つたと見なすことが出来る。我々は、今後、思惟がそこを通してそれ自身から外へ出るにいたる狭い通路が何処にあるのかを知っている。我々が絶対的なものの方へ道を切り開くことが出来るのは、事実性によって、事実性を介してのみである」(98-99,一一〇)。

「この絶対的なものは、実際には、それにとっていかなるものも不可能ではなく、思惟不可能ではなく、そう見えさせないカオスの極端な形態、ハイパーカオス以外の何ものでもない」(99,一一〇)ゆえに、ここから科学の言説の絶対性を保証することを導出することは困難に見える。このカオスとしての絶対的なものは、「誠実な神とは反対に、科学の言説の絶対性を保証することができないように見える」し、「一つの秩序を保証するどころか、すべての秩序の可能的な破壊しか保証しないからである」(99,一一一)。どのようにするのであろうか。

7. メイヤサーと近代科学

メイヤサーは、科学的な諸法則は、無条件的な必然性を持たないと言う。すべての事物は、自然法則や論理法則も含めて、なぜそれであって他でないのかの理由はなく、それは事実、単なる事実性でしかなく、偶然的なものに過ぎないと言う。自然法則は、たまたまその法則が安定的なしかたで維持されているに過ぎないのである。その安定性に理由はない。絶対的なハイパーカオスによって、どのようにも変化可能なのである。その点で、メイヤサーは、ヒュームの因果法則に対する批判をそのまま認める。

しかしそれにもかかわらずメイヤサーは、自然法則の安定的なあり方を事実性として認めるのである。世界は、与えられたそのままのあり方で存在している。「所与(donné)の明らかな無償性の手前あるいは彼方には何もない。その破壊、その出現、その予防の、限界なしの法則なしの力以外の何ものもない」(98,一一〇)。関連の所与としての世界以外に、いかなる世界もない。

そしてこの所与としての世界のうちで、第一性質としての世界は、私たちの存在とは無関係にそれ自体、存在し続けるのである。「所与(donné)において数学的に記述可能であるすべてのものは、我々がまさしくそれを所与や現れとするために存在しようが存在しまいが、存続することができると思える(たとえそれが仮説的なしかたにおいてであれ)ことに理があ

る」(174,一九四)と見るのである。数学的に記述可能なものは、我々の思惟とは無関係に、絶対的なものとして、存在しているのである。ただし、その存在理由、その必然性はなく、単に偶然的なものに見なされなければならないし、その数学的に記述された科学法則は、仮説的なものと見なされなければならないのである。数学的に記述可能なものの絶対性は、「思惟の外の事実的な可能的存在であって、思惟の外の必然的な存在ではない」(同前)のであり、「仮説の資格で、我々とは無関係に存在する存在論的に破壊可能な事実として措定されることができる。言い換えれば、近代科学は、我々に、我々の世界のすべての数学的な再定式化の仮説的ではあるが思弁的な領野を明らかにしている。科学のガリレーコペルニクス的脱中心化は、したがって、次のように言われる。数学化可能であるものは、思惟の相関に還元可能ではない」(174,一九四～五)。数学化可能なものは、思惟の相関には還元できず、我々がそれを思惟しようとしなかりと、思惟とは無関係に存在可能であり、我々はそれを仮説的な資格で理論的に記述することができるのである。近代科学はこのように相関主義とは異なる地平を開いたのである。

8. メイヤスーの思弁的唯物論

カント以来、あるいはバークリ以来の近現代哲学の相関主義は、ガリレーコペルニクス革命による近代科学の脱人間中心主義とは逆の、人間中心主義に立っている。メイヤスーは、近現代哲学の相関主義批判によって、科学が開いた唯物論の地平を回復しようとするのである。その論証過程は、『有限性の後で』を通してみてきたように、これまでの哲学者たちの議論を踏まえたうえで、厳密に展開されている。批判対象である相関主義のそのなかでも最強の相関主義の立場を前提にしながら、その相関主義を破るという手法に則って論証を推し進めるものである。ただ、数学的な自然学の基礎付けを試みたデカルトの『省察』の論証過程と比べて、デカルトが第一の絶対者である神の存在証明から、その神の誠実性を介して第二の絶対的な真理である数学的認識の確実性を論証したのに対して、メイヤスーは、「偶然性の必然性」というハイパーカオスとしての第一の絶対者の存在は論証したが、第二の絶対者である数学化可能なものの絶対性は論証できていない。これは、ガリレー以来の近代科学の真理に依拠して提示されているにとどまっている。

注

(1) Quentin Meillassoux, *Après la Finitude Essai sur la nécessité de la contingence*, Seuil, 2006, p.62、カンタン・メイヤスー『有限性の後で 偶然性の必然性についての試論』千葉雅也、大橋完太郎、星野太訳、人文書院、2016年、p.67。ただし本書の訳文は筆者のものであるが、ancestral と factuelité の訳語「祖先以前の」「事実論性」は、翻訳本に負っている。なお、本書からの引用文は、本文中に原著はアラビア数字で、翻訳は漢数字で記す。

(2) Graham Harman, *Quentin Meillassoux: Philosophy in the Making*, 2nd Edition, Edinburgh University Press, 2015, p.99)

(3) op.cit., p.103

(4) Quentin Meillassoux, *Time Without Becoming*, Edited by Anna Longo, Mimesis International, 2014, pp.20-21

(5) レーニン『唯物論と経験批判論(1)』寺沢恒信訳、大月書店 1966年、pp.84-5

(6) Tom Sparrow, *The End of Phenomenology Metaphysics and the New Realism*, Edinburgh University Press, 2014, p. 88